

続・ネガティブ・ケイパビリティ

2025 年度となりました。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。私ども北海道立精神保健福祉センターも異動等により、新たな体制となりました。これからも北海道民のメンタルヘルス向上により一層努めてまいります。

さて、前号に続き「ネガティブ・ケイパビリティ」についてつぶやきます。というのも、先日下記のような相談事例の報告があり、早急に答えを出さずにそこに踏みとどまる力「ネガティブ・ケイパビリティ」は大切だな、と考えたためです。

その相談は、アルコール依存の家族を持つ方からの「どうしたらいいのでしょうか」という電話でのものでした。当センター職員は、概要をうかがった上で「〇〇したらどうでしょう」とガイダンスしたようです。しかしながらその相談者は、職員のガイダンスについて、「それは行いました。」「そこには相談しました。」と、話したそうです。そして最終的に「専門機関だと思って電話をしたのに」と電話を切られてしまった、とのことでした。

私は、職員がこの相談者の期待に応えられず、残念に思います。相談者は確かに「どうしたらいいのでしょうか」と訴えているのですが、実際には一朝一夕に解決できる答えなどない、そのような事例だったのかもしれませんが。電話相談の限界があるのはわかるけれど、これまでの経過、家族として行ってきたことを聞き取り、それへの労い(カウンセリング的相談)が必要だったのでしょうか。

それが不十分の中、ガイダンス的相談を行ってしまったため、残念な終わり方になったのです。

この事例について、「ネガティブ・ケイパビリティ」の視点で考えてみます。

まずは、相談者について。この相談者はこの電話に至るまで、家族のアルコール問題をどうにか打開しようと取り組まれてきたことが最終的には把握されました。職員が勧めたことについて、ことごとく経験済みだったのだから、「早急に答えの出ない課題」であると半ば考えていた、それでもなお「何か方法があるのでは」と電話を下さったのかもしれませんが。仮にそうであるならば、相談者の取組を聞き取った上でそれについての労いを行うことで「自分はこれまで、できることを十分にしてきた(ということは、早急な解決方法はないのだ。)」と、相談を終えることができたかもしれません。

一方、相談対応については、電話相談の限界はあるけれど、事例のアセスメントを早急に過ぎたのでしょうか。後にわかったことなのですが、当該職員には、「メンタルヘルス課題ごとの相談の型」があったのだそうです。つまり、相談者のこれまでの苦労や解決方法が見当たらず途方に暮れている思いへの共感的理解なしに、「アルコール依存症者家族相談」という答えを出し(アセスメントし)、自身の枠組みの中で対応したことで、相談者の期待に応えられなかったのです。

先日「対人支援に活かす ネガティブ・ケイパビリティ(田中 稔哉 著)」を読み、私が自分なりに整理したところでは、我々に求められる事例アセスメントとは、常にその時点での暫定的アセスメントであって、事例の変化に応じて常に変遷していくものなのだ、と改めて感じました。さらにそれは、私たち支援者の枠にはめるのではなく、相談者自身がどう考えているかを踏まえたアセスメントとする必要もあります。

ただし、このネガティブ・ケイパビリティは、道庁という大きな組織の中で精保 C の立場を伝える場面においては邪魔になることも時にありそうです。どのような場面でこの能力を発揮するか、その見極め、使い分けができるよう努めてまいります。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

1) 田中 稔哉: 対人支援に活かす ネガティブ・ケイパビリティ. 日本能率協会マネジメントセンター, 東京, 2024

(所長 岡崎大介)



編集後記

「キダルト (Kidult)」という言葉がメディアで見たり、聞いたりすることが多いなあと感じまして、というのも、「もしかして私もキダルトかも」と思ったからでしょうか。キダルトとは、Kid (子ども) と Adult (大人) を組み合わせた造語で、「大人になっても子どものような趣味・コンテンツを楽しむ人々」を指し、私もお気に入りのキャラクターたちに囲まれて、癒やされながら日々を過ごしているという点では確かにあてはまるかもと思いつつ、「SNS の発信力」という点では該当しないので、私は「なんちゃってキダルト」もしくは「キダルト見習い」というところでしょうか。何かと外に出かける機会が多くなるこれらの季節、自分好みにカスタマイズしたぬいぐるみの写真を撮る「ぬい活」も今ではすっかり日常の光景になっており、そう考えると、これからますます個性豊かな楽しみ方が見いだされていくのかもしれませんがね。

(pickles the frog)